書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
書籍部「書評」編集委員会
吹田市千里山17
電話(381)1953内線326

対話の断絶の止場
——自己の思想の確立を

関西大学という二大広場に、八十年の伝統が、刻み込まれた。（いや、八十年の歴史が流れたというのであろうか？）明治十六年—昭和と流転した関大の校風、おそらく諸々の風雪にもまれつつ育まれたことであろう。だが、われわれは、「八十年」の歴史の重みをどううけとめ得るのであろうか。

あまりに巨大なこの建物の中にある空間は、そのままわれわれの内部にある空洞に通ならないであろうか。

率直といって、関大の独創となっている児島精神は、我々の内部にどういう連環をもっているのであろうかと疑わずにはおれない。もはや一つの偶像にしかシンボルとしかなっていないのではないであろうか。

"建学から正義を守れ"という大スローガンが、関大の八十年の歴史にいかなる形で結晶され、またそれが、状況に耐える一つの鏡といったいなりえているのであろうか。

われわれが、自己の存在を確認する一つの"点"とは、関大人にとって、"ここ"からではないであろうか。

「書評」は、現在のトータルな状況への積極的アプローチを含む一つの「思想」の「温床」としたい。

同一の広場で、等質であり異質な方法で、混どんとする状況へ、われわれは、各々のモチーフを積極的にぶつけようではありませんか。一つの利害の追求—即物的要求では、決して何物もでてこないであろう。即物的なものに潜在する一つの間隙を埋めるのは、まさに、われわれの問題提起の深さと広さによって保障されるであろう。

われわれとは、ぼくと君であること、人間とはこのような形式しかとりえないこと、この断絶の埋め方が、歴史の刻みであったこと、われわれは、この自明の事柄を、再確認して、「書評」の場に活かしていこうではないか。

関西大学「書評」編集委員会

「韓国の人口と経済」
金哲著

「人口学」的な接近
構造論の欠如に盲点

市原亮平

本書は韓国の人口問題にたいし「人口学」的アプローチをこころみるものである。日本での従来の研究は、アジアというよりは世界の人口学界の最近の収穫の一つとしてその成績をおすすめできる。わたしは帝国主義下の抑圧を身をもって経験してきた、朝鮮人の目からみた韓国の人口分析である点になによりもこの本の魅力をかんじる。

私は人口構造や人口動態の貧困な補正表に生々しい植民地民族のうめきや悲鳴を読みとることができた。「朝鮮人強制連行の記録」の筆者朴慶植氏の綴りによると金哲氏は北鮮と猫国後紗に送いたという。この本を出版するに尽力した帰国賛人氏の序文も心酸まるものがある。日本での険しい生活の結果病魔に冒された金氏は病床にあって校正の筆をとっていた。「怒れる故郷の山肌よ」の思いをたぎしめながら「今はただ故郷の山川に詫びるばかり」と諦観していた金氏が、帰国後故山に何を思い、何を感じたか、いまはもはや知る術とてない。

本書は三編から成る。第一編では韓国歴史の始原期からときおこし解放前と解放後における人口統計に正確な吟味と補正とをおこなっている。たよるべき人口調査の不備や杜撰は外侵をまねいた李朝末の旧韓国権力者の腐敗や無能、さらには日本帝国主義の当然な同化政策に因することをときあかす金氏の筆先にわたくしは赤い炎を感じることができる。第二編では第一編で準備された人口統計にもとづいて解放前後にまたがって人口増加率、出生・死亡を分析し将来人口の推計および、アジア諸国と比較しての韓国人口の特徴を明らかにしている。

クロード・エドモンド・マニー著

現代フランス小説史

重本利一

近視眼的であり、また生来会計係的な性質をあまりもっていないので、私はここではひとつの歴史、最後に起訴状や一括判決となって終わることのないような歴史を、書いてみたいと思ったにすぎない。それは（歴史にはそういうことが起こるように）けっして終わることのないものかもしれない。（「第一章　浮舟の時代」の冒頭より）

前号の「書評」執筆者である小川悟先生は、「書評がもし学問の一環であるなら、私のこの文章はおよそ非学問的である」と書いておられる。同先生の文章が本当に非学問的であるかどうか、あいはこのことばがたんなる自己批判から出たものであるかどうか、といった詮索はさておくとしても、私も私ならの立場で、書評は学問の一環であると思っている。もしも書評がなんらかの啓蒙的な意味をもつとすれば、それはあくまでも学問に寡づけられた啓蒙でなければならないからである。それで今回は、一部の人びとにとっては、少々読みづらい書物、少々理くつっぽい書物をとり上げてみた。二十年まえに日本が戦争に敗れた直後からしばらくのあいだ、つまりアプレ・ゲール（戦後）と呼ばれる時期に、さまざまなフランス文学書がほん訳紹介された。しかもそのほん訳紹介のされかたは、わるくいえば非常にアトランダムで、必然性を上まわる安さえするほどであった。ところが最近では、この傾向は一応落ちつきを見せてきたといえる。目新しいものを追いかけることはやめて、地味な学史や、すぐれた研究書批評書がかなり邦訳されてきたことも、そのひとつのあらわれである。現代のフランス文学を扱ったものでは、大なり小なり文学史的な体裁をとっている書物としては、たとえばボヴデフルの「現代フランス文学の生きた歴史」、アルベレスの「現代小説の歴史」、ピエール・アンリ・シモンの「現代フランス文学史」などとならんで、このクロード・マニーの「現代フランス小説史」も見のがすことのできないものである。

この書物は小説史であって、文学史ではない。しかし、たとえばジャン・アヌイについては語られていないが、「テス・ド・ビ」を語ることによって時人ヴァリーを、また、「ジュザンヌと太平洋」を語ることによって劇作家ジロドーをとらえることは、けっして不可能ではない。イギリス文学やドイツ文学に比べて、元来フランス文学は、散文の領域において、もっともすぐれた発展をとげたといえるので、小説の歴史を文学史のなかで占めるウェイトは、とりわけ二十世紀文学の場合、詩や劇のそれよりも、はるかに大きい。

それにまた、冒頭に引用した著者自身の文章からもわかるように、この書物には、歴史に対する客観性がある。サルトルと異って、クロード・マニーには政治意識はない。したがって、政治上のイデオロギーの立脚した歴史観は無関係であるが、それでも彼女は彼女なりのはっきりした歴史認識をもっている。

そして、冒険の終和が近代的な順序に従かわえられると、不可避的にひとつの方向が示されることになる。もちろん客観的な、普遍的なものではないけれども、読者によって、引き出され得るような、そして他の善意の読者たちが到達しうる結論とくらべることができるようなな、そういうひとつの方向が、この反省の時期とっては、特権的な瞬間というものはない。というのも、歴史の再創造の冒険は、読書と時を同じくするものであって、それと平行して繰り広げられていくことになると思われるからだ。」という文章、つまり読書によってなされる文学史の性格史認識は、クロード・マニーの作家的感覚からくるものであることがうかがえる。事実、彼女はいくつかの批評書のほかに、「ヤスパースとガブリエル・ガルボ」という奇妙な題の小説も書いている。彼女は、批評の必要不可欠の条件たるもっとも確実で、もっとも強制的な義務のモラルであり、他のすべてのモラルはその義務に規制される。かりに、内面的独自形式の「十八才の眼」と、手法的にアンドレ・ジィドの「贋金つくり」に影響されたといわれる「サン・サチュナン」とのあいだに位置を占める「幸福な男」をとり上げても、この父性愛と義務のテーマが、はっきりあらわれている。この作品は、前世紀末を背景として、あまりにも昨日的な困難と、窒息しそうな陳腐な〈幸福〉を描いて、新世界北アメリカの原始林に、真っ白な〈家〉へ、本能的に帰ってこなければならなかったという筋書きを通じて、ここに、〈家〉が代表する伝統と秩序、〈個〉が代表する自由と解放のあいだの葛藤を、心理的に追求している。そこには、父子二代にわたる世代の相異と、モラルの変遷が浮き彫りにされている。そして、戦争によって旧秩序は破壊され、たよるべき支柱を見出しかねて精神的無秩序の状態にあった若い世代に、アンドレ・ジィドの無秩序は主義とは対照的な、いまひとつの極を あたえた点に、この作品の意味がある。

クロード・マニーは、シェランベルジェについて、「彼は厳格主義に陥るのはほど真剣であり、放縦主義に溺れることなく自由であり、分析の厳格性をロマネスクな柔軟性に結合することができた」として、その価値を認めながら、「彼の文体ではなにか堅苦しさをとどめており、……結局、彼の倫理学さえ模作なのである」と批判する。さらに彼女は、金殿的に「私が〈モラリスト〉と呼ぶ小説家たちの主な欠点は、彼らの受動性や模倣からつねに消えない臆病な寒さとしたものの存在であるのだ」ともいっているが、とにかく、現代のフランスにおけるモラリストの小説家を論じる場合には、肯定的にしろ否定的にしろ、彼女と同じようにリヴィエール、ラクルテル、シャルドンヌ、ラディゲなどとともに、シェランベルジェの名を忘れるべきではない。

ところで、新しい思想をよりよく表現するための新しい手法という原則が成立するものとすれば、クロード・マニーの「小説史」も、他の多くの批評家、研究家と同様に、この点に関して盲目ではなかった。この「小説史」では、十九世紀小説に対する批判者として、また、そのような批判に依拠しながら作品を書いた文学者として、当然のことながら、プルーストやヴァレリーとともに、「贋金つくり」の著者としてのアンドレ・ジィドに、多くのスペースがさかれている。世界的名作であるとハックスリーの大きな相異があるいは、「ここにおいて、ジィドはその「贋金つくり」においてブルーストやジョイスとほぼ同様の空間的広がりを、多角的な視点によってとらえようとすることである。「贋金つくり」は、いわば主題の二重性をもっていて三人称による客観描写と代表的な人物であるエドワールの日記（〈私〉）とから構成されているのである。物語りの時間的進行は、二つの視点から眺められることになる。もちろんこれと類似の形式は、ジィド以前の作家にも見られることであるが、たとえば、ホフマンの「牡猫ムルの人生観」や、フロベールの「ボヴァリィ夫人」のある部分などがそうであるが、クロード・マニーもこの点に言及し、「贋金つくり」におけるエドワールの日記のもつ意味を、オルダス・ハックスリーの二つ位法」におけるフィリップ・クォールズの日記と比較して、次のように、まさに適確に説明している。「エドワールの日記は、作品の筋そのものの なかにくり入れられ、筋にまったく同質化しているのだ。それに反してフィリップ・クォールズの諸考察は、作者の性格どおり、どこまでも筋に並行しており、はじめから物語の欄外に位置したままで、筋に干渉しての流れを変えていくようなことは絶対にない。そして筋の外側にあってそれを説明しているのだ。」このことばのとおりに、これが私の指摘したい第二点である。

この書物は一九五〇年の出版で、第一巻とは違っているのに、いまだに第二巻が刊行されていないようである。邦訳の解説にも述べられているとおり、クロード・マニーは、単行本以外に、アンドレ・マルロー、ロジェ・ニミエなどを論じた文章を、「エスプリ」誌その他に発表しているので、おそらくこれらが第二巻以降に収録されるはずであろうが、目下のところ彼女はアルコール中毒で入院中らしい。たとえば、デュアル、アンリ・シモンなどは、マニーの関心は、「思いがけぬ小説」という一節をうけ、シュール・ロマン（超小説）とかノン・ロマン（非小説）といったことばを用いて、新しい小説というものの性格を分析し、彼女なりの規定をおこなっていることなどを考えあわせると、やはり、アンチ・ロマンによって代表される技術的革新派の人びとに向けられていくのではないだろうか。すでにロブグリエやビュトールも、いろいろな批判を受けながら、それぞれの方向に成長している。ほんの一例ではあるが、「ロブグリエの小説」の著者モリセットの分析によって、〈意味〉の破壊者たる即物主義者としてのロブグリエに、ユマニストとしての面が附与された現在、批評家の方法もいっそう複雑なものとなるなければならないだけに、創造批評家としてのクロード・マニーの今後の活躍に、大きな期待をかけたいと思う。

（仏文学科助教授）

峻厳な文学の実践的信者

思想と技法に関する形而上学

「自己に密着しないこと」を心がけながらも、ともすれば自己に密着しがちな体質の持ち主だからでもあろう。歴史家自身が、そもそも歴史から生まれてくるものだ、というサルトルに比べて、クロード・マニーは、その日その日に作られていく歴史、展開していくことに対して、少なくとも文学を好む者たちが、べつに批評を加えずに生きている歴史を、体験的にとらえようとしているのである。

なおこの「小説史」は、機別的総花的ではないことも大きな特色である。（ボヴデフルやルネ・ラファーヌ の文学史がもういちどいう意味ではない。）人名辞典的にならがちなこの種の書物の欠陥は一掃されている。各章各節は、それぞれ独立した研究論文に匹敵する。

批評家肌の読者たち、いくらか形而上学的なマニーの論理を通してルーの「現代フランス文学史」からのほん訳である。フランスにおいても、雑誌論文を除けば、ジャン・ランベールとマリー・デルロンのもの以外には、この作品に関するまとまった研究は見当らない。それは、ランベールのいうように、シェランベルジェの作品には「愛の場面が含まれていない」からであろうか。彼においては、「愛はできるだけロマネスクではなく、ラ・ファイエット夫人の作中人物で、少なくともその感情の発生のさいに愛がもつ、あのラシーヌ的宿命さえほつり出してしまう」からであろうか。彼の作品を支配しているテーマは、「不安な父性愛」から「栄光の人スタファーヌ」にいたるまで、一貫して父と息子の関係に対する執念である。「コルネイユのようにひとつのテーマは、スパルタ的または コルネイユ的なすべてのモラルを支配するもので、人が自分自身にもつ、支性を見出しかねて精神的無秩序の状態にあった若い世代に、アンドレ・ジィドの無秩序主義とは対照的な、いまひとつの極をあたえた点に、この作品の意味がある。

クロード・マニーは、シェランベルジェについて、「彼は厳格主義に陥るのはほど真剣であり、放縦主義に溺れることなく自由であり、分析の厳格性をロマネスクな柔軟性に結合することができた」として、その価値を認めながら、「彼の文体ではなにか堅苦しさをとどめており、……結局、彼の倫理学さえ模作なのである」と批判する。さらに彼女は、金殿的に「私が〈モラリスト〉と呼ぶ小説家たちの主な欠点は、彼らの受動性や模倣からつねに消えない臆病な寒さとしたものの存在であるのだ」ともいっているが、とにかく、現代のフランスにおけるモラリストの小説家を論じる場合には、肯定的にしろ否定的にしろ、彼女と同じようにリヴィエール、ラクルテル、シャルドンヌ、ラディゲなどとともに、シェランベルジェの名を忘れるべきではない。

ところで、新しい思想をよりよく表現するための新しい手法という原則が成立するものとすれば、クロード・マニーの「小説史」も、他の多くの批評家、研究家と同様に、この点に関して盲目ではなかった。この「小説史」では、十九世紀小説に対する批判者として、また、そのような批判に依拠しながら作品を書いた文学者として、当然のことながら、プルーストやヴァレリーとともに、「贋金つくり」の著者としてのアンドレ・ジィドに、多くのスペースがさかれている。世界的名作であるとハックスリーの大きな相異があるいは、「ここにおいて、ジィドはその「贋金つくり」においてブルーストやジョイスとほぼ同様の空間的広がりを、多角的な視点によってとらえようとすることである。「贋金つくり」は、いわば主題の二重性をもっていて三人称による客観描写と代表的な人物であるエドワールの日記（〈私〉）とから構成されているのである。物語りの時間的進行は、二つの視点から眺められることになる。もちろんこれと類似の形式は、ジィド以前の作家にも見られることであるが、たとえば、ホフマンの「牡猫ムルの人生観」や、フロベールの「ボヴァリィ夫人」のある部分などがそうであるが、クロード・マニーもこの点に言及し、「贋金つくり」におけるエドワールの日記のもつ意味を、オルダス・ハックスリーの「二位法」におけるフィリップ・クォールズの日記と比較して、次のように、まさに適確に説明している。「エドワールの日記は、作品の筋そのものの なかにくり入れられ、筋にまったく同質化しているのだ。それに反してフィリップ・クォールズの諸考察は、作者の性格どおり、どこまでも筋に並行しており、はじめから物語の欄外に位置したままで、筋に干渉しての流れを変えていくようなことは絶対にない。そして筋の外側にあってそれを説明しているのだ。」このことばのとおりに、これが私の指摘したい第二点である。

この書物は一九五〇年の出版で、第一巻とは違っているのに、いまだに第二巻が刊行されていないようである。邦訳の解説にも述べられているとおり、クロード・マニーは、単行本以外に、アンドレ・マルロー、ロジェ・ニミエなどを論じた文章を、「エスプリ」誌その他に発表しているので、おそらくこれらが第二巻以降に収録されるはずであろうが、目下のところ彼女はアルコール中毒で入院中らしい。たとえば、デュアル、アンリ・シモンなどは、マニーの関心は、「思いがけぬ小説」という一節をうけ、シュール・ロマン（超小説）とかノン・ロマン（非小説）といったことばを用いて、新しい小説というものの性格を分析し、彼女なりの規定をおこなっていることなどを考えあわせると、やはり、アンチ・ロマンによって代表される技術的革新派の人びとに向けられていくのではないだろうか。すでにロブグリエやビュトールも、いろいろな批判を受けながら、それぞれの方向に成長している。ほんの一例ではあるが、「ロブグリエの小説」の著者モリセットの分析によって、〈意味〉の破壊者たる即物主義者としてのロブグリエに、ユマニストとしての面が附与された現在、批評家の方法もいっそう複雑なものとなるなければならないだけに、創造批評家としてのクロード・マニーの今後の活躍に、大きな期待をかけたいと思う。

（仏文学科助教授）

新しい手法に注目

ジイドにスペース割く

物語が単純化され図式化され、こうした類型化がクリエーションを構成している。それらのヴァリエーションは、チーマとの関係から見て、側面的から傍注的であり、チーマを異ったことばで ほん訳したものである。それに反してジイドの場合、エドワールの日記はジイド自身の日記に同じほど複雑であり、メタフィジックな響かさを具えている」と述べている。

「贋金つくり」の第三部の最初の部分では、三人称による客観描写がまったく姿を消してしまって、エドワールの日記だけが、物語の時間的進行を支えている事実は作品構成上注目すべきことである。同じ問題に関する分析は鋭的につづけられ、彼女はさらに、「（小説家の日記）という方法は、「対位法」の場合、理論的に、しかもかなり抽象的かつ人工的に小説を拡大するのに使われているにすぎない。「贋金つくり」の場合、作家の日記は作品に一種のメタフィジックな深みを与え、作品はその深みから唯一の超節的な意味をひきだしているのである。」あるいは、「ここにおいて、ジィドはその深みから唯一の超節的な意味をひきだしている。後者の場合には、はっきりとずれ」ているとは、新しい思想を支えている事実は作品構成上注目すべきことである。

この書物は一九五〇年の出版で、第一巻とは違っているのに、いまだに第二巻が刊行されていないようである。邦訳の解説にも述べられているとおり、クロード・マニーは、単行本以外に、アンドレ・マルロー、ロジェ・ニミエなどを論じた文章を、「エスプリ」誌その他に発表しているので、おそらくこれらが第二巻以降に収録されるはずであろうが、目下のところ彼女はアルコール中毒で入院中らしい。たとえば、デュアル、アンリ・シモンなどは、マニーの関心は、「思いがけぬ小説」という一節をうけ、シュール・ロマン（超小説）とかノン・ロマン（非小説）といったことばを用いて、新しい小説というものの性格を分析し、彼女なりの規定をおこなっていることなどを考えあわせると、やはり、アンチ・ロマンによって代表される技術的革新派の人びとに向けられていくのではないだろうか。すでにロブグリエやビュトールも、いろいろな批判を受けながら、それぞれの方向に成長している。ほんの一例ではあるが、「ロブグリエの小説」の著者モリセットの分析によって、〈意味〉の破壊者たる即物主義者としてのロブグリエに、ユマニストとしての面が附与された現在、批評家の方法もいっそう複雑なものとなるなければならないだけに、創造批評家としてのクロード・マニーの今後の活躍に、大きな期待をかけたいと思う。

（仏文学科助教授）

お詫び
「書評」第一号所載の小川悟先生の「元寇」書評の中誤植がありましたことをお詫びします。
―編集委―

時代の要求に応える
高い学問的水準に立つ辞典
経済学辞典
大阪市立大学経済研究所編　定価二八〇〇円
最近の経済学の飛躍的進歩と内外政治経済事情の大きな変動に応ずるため、旧版『経済学小辞典』を全面的に改稿し、〈経済学辞典〉としてここに新しく提供する。近代経済学及びマルクス経済学それぞれの分野における専門の専者の学者六百余氏の緊密な協力による本辞典は、質量ともに書類を圧倒する内容の充実を誇り得るものと信ずる。
〈特色〉―近代経済学とマルクス経済学の両分野における最新の学問的成果の集大成。▼まとまった知識の体系的把握ができるように、一項目にかなりのスペースをきく中項目方針をとった。▼適宜に小項目を配して簡潔正確に概念を把握しうるようにした。▼単に経済学上の理論的事項・人名にとどまらず、さらに経済活動全般にわたる項目を収録し、実際面での活用に十分な考得るようにした。
A5判・上製函入・クロース装・一三五〇頁・総項目数一七〇〇余
東京神田一ツ橋／振替東京二六一四〇
岩波書店

今から揃える人のために
全集は定評ある筑摩書房版で
あなたがご希望の書籍名を生協書籍部までお知らせ下さい。また全集購入のご相談もお気軽にお寄し下さい。
世界文学大系　全96巻　別巻2
現代文学大系　全69巻
定本・柳用国男集　全31巻　別巻5
芥川龍之助全集　全8巻　別巻1
宮沢賢治全集　全11巻　別巻1
特製版森鷗外全集　全8巻　別巻1
太宰治全集　全12巻　別巻1
世界の歴史　全17巻　別巻1
日本の百年　全10巻
河上肇著作集　全12巻
生協書籍部までいらっしゃい
筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八